

# ケイコ



キャンディやぶこ

## ケイコ

---

ケイコはモテていた。

男女とも

すべての価値基準が

「カワイイ」で

ある学生時代、

カワイイケイコは最高にモテていた。

可愛いだけでなく、可愛げもあったケイコ。

およそ私の持っていないものを

すべて持っていたケイコ。

外見がダメなら内面磨き・・・

そんなことはツコほども考えなかった。

外見がアウトだと

モテないだけではなく、

そこからやっかみ、ひがみが発生し、

性格まで悪くなる。

だけど、そんな心の内はひた隠しにし、

どうか嫌な性格がバレませんように。

と表面上を取り繕って

私は一生懸命いい子を演じて

ケイコとつきあってきた。

ケイコはそんな私と

気持ちよくつきあってくれていた。

それがより一層私をいらだたせていた。

そんなケイコと

同一線上に並ぶ時がやってきた。

卒業後20年もたってからだった。

同窓会で再会したケイコは離婚していた。

## ケイコ 2

---

「一人になってスッキリしたわ」というケイコの横顔には  
ホウレイ線が浮き出ている。

資産家の息子と結婚して裕福な生活をしているという  
噂は聞いていたが、その後のことは  
何も聞くことがなかった。

ケイコのほうから離婚したときに  
子どもの親権がとれず、今は本当に一人であるということを  
ポツポツ話し始めた。

「そう・・・大変だったね・・・」  
言いながら私は  
(なーんだ。じゃあ、今は私のほうが幸せなんだ)  
と優越感に浸っていた。

学生時代は、可愛さだけが際立っていた  
たケイコだが、

20代に入ると、さらに魅力が増した。  
一度バッタリ出会った時があったのだが、  
女らしさも加わり、  
輝くばかりの美しさを誇っていた。  
今も、美しい女の部類に入るのだろう。



その証拠に  
後日送られてきた同窓会の  
写真を見て  
子どもまで「この人キレイ」と言ったくらいだった。  
立ち姿からして、女優立ちが自然に身につけていて、  
気品まで感じられた。

「やっぱりケイコと同一線上になんて  
立てるわけない」  
私はケイコの顔をペンで黒く塗りつぶした。

## ケイコ3

---

ケイコと同じクラスだったのは、  
中学2年のときだけ。

3年になったら違うクラスになり、  
付き合いも疎遠になった。

高校は違っていたのに、何かとケイコの噂は私の耳にも入り、  
聞きたくない情報がどんどん飛び込んできた。

1クール恋愛をされていて、男をとっかえひっかえしている。  
だの、

ラブホテルで一緒にお風呂にはいってるらしい。

だの、

ケイコの持ち物は、かばん、アクセサリー、洋服に至るまで  
全て男からのプレゼントだということ。

中学時代、可愛さゆえに

モテてはいたけれど、無垢な少女であったはず。

高校に入ってあまりのモテぶりに、

人格まで変わってしまったのだろうか。

そんな女が同性に好かれるはずはない。

女子からは、ケイコを批判する声が届いた。

中学時代にケイコのことを好きだった女子も  
一様に嫌いだと断言しはじめた。

しかし、それだけの圧倒的な存在感が

あったからこそその非難であった。

しかし、ケイコは今確実に不幸な女なのだ。

## ケイコ4

---

私も20年もたっているのに、  
まだケイコに対するやっかみ、  
ひがみ、悪意が  
泥の塊のように  
心の底に沈殿していることに自分でガクゼンとした。  
さらにその塊の芯の部分には  
自分で目をつぶってきたものが存在している。  
ずっと忘れよう忘れようとしてきたものだ。  
塊はナワでぐるぐる巻きにされ、  
さらにそれらが二度と出てこれないように、  
重しのようにふたをし、封印してきた。  
なのに、  
今ごろになって  
ケイコと会ってしまったばかりに、  
重しがゆっくりとその役目を  
解き、塊が私の目の前に露呈された。

その塊の原因ともなったケイコ本人から連絡がきた。  
———同窓会でお会いして本当にうれしかった。  
また一緒に食事でもしましょう。

私はケイコに会うのが怖かった。  
今度会ったら、積年の思いが  
口をついてでてしまうのではないか。  
若い時には言えなかった言葉は、  
35歳という年齢は言わせてしまうのではないか。  
それならそれでいい。  
今こそ、苦しめられてきたものと  
今度こそ決別できるのだ。  
その代わりに、自分の苦しみを相手に押しつけることになる。  
いや、ケイコは苦しまないだろう。  
ケイコはそんな女じゃない。  
それ以前に何ともおもってないはずだから。  
もし私がその話をしたら、すっとぼけられてしまうか、  
本当に記憶の中に何もなければいい。



## ケイコ5

---

招待されたところは、ケイコの自宅サロンだった。

ネイルアートの店を開いていた。

(離婚しても、男がかりでこんなお店がひらけるなんて・・・)

私の心を見透かしたように、ケイコが

「あ、これモトモト結婚している時から

私が開いていたお店なの」

この言葉を信じるしか、自分を救う道はない。

大理石の玄関からは、ふかふかのじゅうたんを敷き詰めた

吹き抜けのホールが見える。

靴を脱ぐべきなのか。否か。それすらも判断できない。

「あ、いいのよ。そのまま」

見れば、ケイコもヒールのあるパンプスをはいたままだ。

歩いて音のしないジュータンの上を通り抜け、

シャンデリアの飾られている部屋に案内された。

「コーヒー飲む？紅茶？」

「・・・あ、どちらでも・・・」

「ダメよー。女は意思表示はっきりしなきゃー。

おいしいクッキーいただいたから、紅茶にする？」

ほどなく、ケイコがティーポットに入れた

紅茶とカップを運んできてくれた。

きっとどこかのブランドだろうが、何て名前なのかはわからない。

クッキーを一口かじった。

とてもおいしい。

「本当にヨシミに会えてよかった。

同窓会で見た時、うれしかった・・・」

しみじみそう語りながら

私をじっと見つめる。

この瞳にいったい何人の男がまいったんだろう。

ケイコは細長い指先とその先に光るネイルをきらめかせながら、

ソーサーに左手を添え、カップを持った。

そのさりげない一連の動作にも

どことなく気品が漂っている。

「ねえ・・・せっかくだから、

私のネイル、していってくれない？」

「え・・・でも・・・」

やっぱり営業だったんだ。



「あ、お金なんてもちろんいないよー。  
ぜひ、ヨシミにネイルさせてもらいたくて」

## ケイコ6

---

「ケイコ・・・あのさ・・・」

ついに、私は重い口を開いた。

「なに・・・？」

パッと目を見開いた黒目がちな

ケイコの目はまた別な魅力があって本当にキレイ。

まつげを1本むしりにとって、

吹き飛ばしたくなるくらいだ。

「丸山くん・・・覚えてるでしょ？」

「まる・・・やま・・・くん？うーん・・・」

ケイコは過去の男手帳の名簿でも

くっているかのように、考え込んだ。

「ヨシミと同じ時・・・てことだから

中学の時だよ。あーなんとなく思い出した。

卒業式の前日に告白された・・・」

そう・・・丸山君は

私とつきあう一歩手前ギリギリな状態で

私は有頂天になっていたのに、

当時彼氏のいたケイコに告白したのだ。

そしてケイコはあっさりふった。

「あのとき。私寺本君とつきあってて、

丸山君っていう子、違うクラスだったしよくわかんなくって。

お断りしたんだよね」

そう・・・私と丸山君は同じクラスだったんだよ。

そのこと自体も把握してないんだろうか。

「それが・・・それがどうしたの・・・？」

ケイコ何も知らないの。

しらばっくれているのか？

中学の時から

彼氏がいたケイコ。

その後高校では

多数のボーイフレンド達に

取り囲まれて送っていたケイコだが、

丸山君のことなんて

小魚の切れっばしのようなもんで、

記憶のかけらもないなんていわせない。

私と丸山君は、高校に入ってから  
ふとしたことで付き合うようになった。  
焼けぼっくに火がついたような感じだったが、  
私はうれしかった。

なのに、やっぱり丸山君は  
ケイコのことを忘れられなかった。  
何かとケイコの話を持ち出し、  
私が仲良かったことを覚えていて  
会わせてくれるよういつてきたり、  
もしかしてそれが目的で  
私と付き合ったのか、とおもわせるほどで  
何度もケンカをした。  
そのうち、ケイコを駅で待ち伏せしたり、  
手紙を渡すようなこともしていたようだ。  
それでも私ははじめてつきあった丸山君のことを  
嫌いになれず、ずるずるつきあっていた。  
でもある日、  
丸山君とケイコがつきあっているという  
噂を聞いた。  
どこまで本当なのか、  
一時的なものだったのか

真相は今もわからないままだ。  
それを確かめるのは  
本当に怖い。  
でも、今も  
あの時丸山君とつきあっていたなら・・・と  
夢想する私がいる。  
そしてケイコさえいなければ・・・と  
憎む私がいる。  
しかし、ケイコが  
悪いのだろうか？  
「あなたに魅力がないからじゃないの」といわれれば  
なんて答えるのか。



「あともうちょっとで完成だから。  
乾くまでちょっと待っててね」  
ケイコは道具を片付け始めた。  
「私・・・ずっとヨシミがうらやましかった」  
「えっ・・・？」  
今・・・なんて？私のどこがうらやましいの。  
「ヨシミ・・・ずっとソフトボールやってたでしょ。  
かっこよかった～私、運動できないから本当うらやましかった」  
そうなのだ。ケイコは超がつくくらい、運動音痴なのだ。  
しかし、そんなことはモテることには、  
なんの支障もなかった。  
スポーツ万能な男子は確かにモテるが、  
スポーツなんて出来なくても女子はモテる。  
スポーツが出来る女子が  
モテるとは限らない。  
私はただモテないうさばらしをするかのように、  
中学時代はソフトボールに熱中し、年中真っ黒だった。  
髪の毛もショートカットにし、色気のかけらもなかった。  
「ソフトボール部の女子って  
女の子からモテルのよね。ヨシミ、女子からモテたでしょ？」  
「女からモテても仕方ないよ。」



「私・・・高校時代自分で言うのもナンだけど、  
すっごくモテて、人生最大のモテ期だった・・・」  
知ってますよお～言われなくとも。。  
「でも・・・男子にモテればモテるほど、  
女子からは嫌われていったわ」  
そりゃーそうでしょう。アナタそれ自覚してたのね？  
「今思うとさ・・・いくら男の人にモテても、結婚するのはたった一人なんだから」  
そうだよ。

「たくさんモテたからって、どうとゆうことはないのよね」

あるよ！大アリだよ！

ケイコ、いい思いいっぱいしてきたやん。

モテて得意な気持ち、たくさんのものを買ってもらって

ちやほやされる気持ち。そのほか、私には味わえなかった思い。

「今。。結局一人になって、それはそれで、楽しい反面

さみしいこともあるのよ」

さみしい？何が一体さみしいのか？